

# えこめ、る

NO.13

1992.9



## ワークショップの案内

第21回 9月12日(土) P.M.2:30~5:00 (会場:大阪教育大学天王寺分校12教室)  
「地球教育について(仮題)」  
マーク・ベビントンさん(地球教育研究所)  
通訳:川島 憲志さん

第22回 10月31日(土) P.M.2:30~5:00 (会場:大阪教育大学天王寺分校)  
「総合学習『環境学』の取り組みから」  
奈良女子大学附属中・高等学校の先生方

## 関西支部主催 環境教育シンポジウム

日時: 11月21日(土) A.M.10:00~P.M.5:00  
会場: 甲南大学(阪急神戸線,岡本駅下車)  
日程: 午前 一般報告  
午後 シンポジウム「環境教育の今日的課題(仮題)」  
基調講演 鈴木善次氏(大阪教育大学)  
パネルディスカッション パネリスト未定  
なお、詳細は決定次第お知らせします。

## 募集

- 午前の「一般報告」で発表を希望される方を募集します。
- ・日本環境教育学会会員の方
  - ・報告のテーマは環境教育に関するものなら理論・実践など何でも可
  - ・申し込み方法:はがきに1.氏名 2.所属 3.テーマ 4.連絡先を書いて関西支部事務局(下記)宛に9月末日までに送って下さい。

(送り先)日本環境教育学会 関西支部

〒543 大阪市天王寺区南河堀町4-88  
大阪教育大学 環境科学教育研究室 気付

# 開発教育の視点から 環境教育を考える

第20回 ワークショップ報告

岩崎 裕保

グローバル教育は、各国による国際理解を推進するためのさまざまな世界規模の努力にその源がある。ユネスコ憲章前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」と述べられている。この基本理念のもと、ユネスコは国際理解教育を推進してきた。それは先進諸国間の相互理解に重点を置いたものであり、日本の国際理解教育も、他国、他文化理解に重点を置いてきた。

1943年の第18回ユネスコ総会は、「国際理解、国際協力および国際平和のための教育ならびに人権および基本的自由についての教育に関する勧告」を採択し、これを「国際教育」と呼ぼうと提唱した。この「教育勧告」は加盟国全ての教育政策の中にグローバルな視点を含むよう求めており、「国際教育」の指導原則を

1. すべての段階および形態の教育に国際的側面と世界的視点（グローバル・パースペクティブ）をもたせること。
2. すべての民族、その文化、文明、価値および生活様式（国内の民族文化および他国民の文化を含む）に対する理解と尊重。
3. 諸民族および諸国民の間に世界的な相互依存関係（グローバル・インターディペンダンス）が増大していることの認識。
4. 他の人々と交信する能力。
5. 権利を知るだけでなく、個人、社会集団および国家にはそれぞれ相互に負うべき義務があることを知ること。
6. 国際的な連帯および協力についての理解。
7. ひとりひとりが、自分の属する社会、国家および世界全体の諸問題の解決に参加する用意をもつこと。

としており、また、取り扱うべき諸問題としては

1. 諸民族の権利の平等と民族自決権。
2. 平和の維持。諸種の様式の戦争とその原因および結果。軍備縮小。軍事目的のための科学と技術の使用を禁止すべきこと、および平和と進歩のため科学と技術を使用すべきこと。国家間の経済的、文化的および政治的関係の性質と効果、並びにこれらの関係のため特に平和維持のための国際法的重要性。
3. 難民の権利を含む人権の行使と遵守を確保する措置。人種主義とその根絶。種々の形態の差別に対する戦い。
4. 経済成長、社会開発およびこの両者の社会正義に対する関係。植民地主義の非植民地化。開発途上にある国への援助の方法と手段。文盲根絶の戦い。病気と飢餓の防止運動。生活の質の改善および健康の水準を可能な限り高めるための戦い。人口増加およびこれに関連する諸問題。
5. 天然資源の利用、管理および保存。環境汚染。
6. 人類の文化遺産の保存。
7. 前期の諸問題の解決のための努力についての国際連合組織の役割と活動方法ならびにその活動の強化および促進の可能性。

をあげている。しかしながら、日本ではこの「教育勧告」以降も他国・他文化理解中心の国際理解教育が推進され、教育の「国際化」の内実は、国際交流・英語教育・帰国子女教育に矮小化されている。

1974年のユネスコ「教育勧告」の背景には、環境の破壊、貧困、人権の侵害そして天然資源・エネルギーの枯渇といった問題があり、解放のイデオロギー——政治的・経済的解放のみならず、女権・人権などの個人的・精神的解放も含めて——も、思考方法に大きな影響を与えた。

こうした中から、途上国の状況を正しく理解しようという消極的な「開発教育」がおり、次第に低開発の原因、あるいは国際間の経済的不公平を問ひ、低開発が人類の平和と繁栄にいかに関わるのか、また開発はそれぞれの地域の実情にあわせてなされるべきではないか、といった質的な深まりが見られ、世界相互依存関係という視点から、南北問題の構造を知識として理解するだけでなく、開発問題に焦点をあて、低開発の諸相と原因を理解し、開発のために積極的に参加しようとする態度を養うことを目標とする「開発教育」が1980年代に入って盛んになってきた。ここで言う開発とは、先進工業国、発展途上国双方における人間の権利と尊厳、自立、社会正義を実現していくための、個人と社会のよりよい変化を意味している。

「国際理解教育」が東西という座標軸であるとすれば、「開発教育」は南北という座標軸を提示したことになる。この二者を合わせると、ユネスコ「教育勧告」の提唱する「国際教育」と大きく重なりあう。また、「開発教育」は、参加型の授業を大切にしようとしており、知識伝達型の多い日本の教育現場には、一つの刺激である。

ところで S. Greig, G. Pike, D. Selby の Earthrights (WWF 1987) では、開発教育、平和教育、人権教育、環境教育は、狭義でとらえればあまり共通点がないように見えるが、広義ではむしろその線きがむずかしいくらいだ、と述べ次表のように説明している。(pp. 29 - 30)

	狭いとらえかた	広いとらえかた
開発教育	①第3世界の問題 (開発について教える) ②開発に関する西欧的観点の無条件の受容 ③援助を通じての解決 ④生徒の慈善事業へのかかわり	①世界の開発/相互依存関係 ②非西欧的視点の探求 ③社会内および社会間にある経済的・政治的秩序の変革による解決 ④意志決定過程に参加するための技能の育成 (開発のために教える)
環境教育	①地域の環境 ②伝統的な生物学的、地理学的重点 ③環境に対する西欧的観点の無条件の受容 ④環境に対する関心を深め、学習/研究の技能を身につける (環境について教える)	①地域・国・地球レベルの環境面での相互依存性 ②人間行動と地球エコシステムの間関係の探求 ③環境に関する非西欧的観点の探求 ④環境に対する意識を高め参加の技能を身につける (環境のために教える)

今後、開発教育・平和教育・人権教育・環境教育は、たがいに重なる領域で成果を取り入れ、幅広いローバル教育を構想していく必要がある。

参考文献 大津和子「国際理解教育」国土社 1992  
 「国際理解」23号 国際理解教育研究所 1991  
 教職研修総合特集 No. 90「環境教育読本」教育開発研究所 1992

岩崎裕保  
 京都芸術短期大学芸術文化研究室  
 ☎ 075-791 9121 Fax 075-791-9127

次のような人を見つけましょう。

- A. ここ1カ月間のうち、国立公園を訪れた人。どの公園ですか？
- B. 環境庁長官の名前を知っている人。その名前は？
- C. 環境保護団体のメンバーである人。どのグループですか？
- D. 環境保護団体のボランティアをやっている人。どのグループですか？
- E. 1987年度の国連の環境と開発についてのレポートのタイトルを知っている人。タイトルは？
- F. 環境保護の集会や行進に参加したことがある人。いつでしたか？
- G. 通勤や通学的手段として、公共交通機関自転車を使っている人、または歩いている人。いつからですか？
- H. エアコンをなるべく使わないようにしている人。なぜですか？
- I. 自分の家や庭ではスプレーや殺虫剤などの化学薬品をなるべく使わないようにしている人。なぜですか？
- J. 紙、空き缶、びんのうち2つをリサイクルしている人。どの2つですか？
- K. 環境問題について新聞や雑誌に投稿した人。何の問題についてですか？
- L. 地域の環境問題について政治家に手紙を書いた人。何の問題についてですか？
- M. 自分に直接影響がある地域の環境問題を指摘できる人。どの問題ですか？
- N. 自宅で省エネルギーを実践している人。どうやって？
- O. リフレッシュするために行くお気に入りの環境はありますか？どこですか？
- P. 自分に直接影響する地球規模の環境問題を指摘できる人。どの問題ですか？

A. 名前： どの公園？	B. 名前： 名前？	C. 名前： どのグループ？	D. 名前： どのグループ？
E. 名前： タイトル？	F. 名前： いつ？	G. 名前： いつから？	H. 名前： なぜ？
I. 名前： なぜ？	J. 名前： どの2つ？	K. 名前： 何の問題？	L. 名前： 何の問題？
M. 名前： どの問題？	N. 名前： どの問題？	O. 名前： どこ？	P. 名前： どの問題？

八尾 哲史

大阪大学で環境工学という難しそうな勉強をしていた八尾くん。実は子供が大好きな大阪府のキャンプカウンセラー出身。学会の創立大会で、大勢の聴衆の中ものおじせずシャープな切口で質問をしていた若者が彼。これからの関西の環境教育に期待される人物です。

しばらく環境教育の活動からご無沙汰をしていたので、ここんと勤がすっかり鈍ってきている気がする。環境教育と出会ってからはや4年。思えば、この4年間で、ほとんどの人が「環境」なんかに関心なんてなかったのに、昔から「環境」について深い関心があったよ、つてな顔になってしまった。時流とは、なんともすごいものですね。

子どもとの触れ合いを求めて始めたキャンプ活動が長じて、なんとか企業の中でその延長ができないものかとキャンプ事業をやっている教育産業を捜しまわり、巡り会えた会社でのキャンプとは無縁の生活が1年半。別に夢が破れたわけではない、当時のメンバーが、最前線で悪戦苦闘しながらもなにはともあれ環境教育に取り組んでいるのを見るにつけ聞くにつけ、若さだけが取柄だった私にも焦りがでてきた。これではいかんと一念発起、公務員試験を受け、8月から箕面市役所にて勤務。

しかし、配属先は無念、やはり環境教育の現場からは遠い遠いところ（都市計画部都市計画総務課）。今、学生として頑張っている人たちに、如何に仕事に直結するのが難しい分野か、身に染みて感じる日がやってこないよう、願ってます。

でも、せつかく都市計画に携われるのだから、視点を変えて「環境教育が展開できるまちづくり」と「環境教育がつくるまち」を2本のテーマに自主研修を重ねようと目下思索中。またなにか、いいアイデアと情報があれば、ぜひ教えてくださいませ。

「まち型の環境教育」実践者、としてやってきたが、どうもその道から外れそうにない。なんせ、まち型の環境教育、なんて自分では言い続けてきたが、何か確固たるものがあるわけでもないし、自然系のようにノウハウが蓄積されているわけでもない。でも、私たちはまちに住む。皆とは言わないが、そしてもちろん皆がそれを望んでいるとも思わないが、それでも多くがまちに住む。だから、自然にばかり目をむけずに、生活を足元から支えている「まちそのもの」にももう少し目をむけたっていいんじゃないか、つて思う。足元といえ、そう、毎日踏んづけている「道」、これだつて結構素敵な環境教育のフィールドである。

道は「未知」に続く。つまり、「ここ」と「どこ（未知）」を結ぶ重要な環境要素である。そして、結び目だからか、みちにはまちの要素が吹き出してくる。

目線をあげれば、建物が並ぶ。人間にとって、生物にとって暮らしやすい建築つてなんだろう。屋上にあるさまざまな装置、あれはいつたい私たちの生活の何を支えているのだろう…

まっすぐ見れば、人が、車が行き交う。どんな人にでも、どんな時にでも優しい道だろうか、動いていることで失っていることがないだろうか、そして人はまちの中でどんな暮らしをしているのだろう…

目を伏せれば、道そのものが顔を見せる。ごみ、溝、アスファルトと土、マンホール、道にはいつたい何があるのだろう、そしてそれはいつたいどうしてそこにいるのだろうか…

自然を見る目は本当に素晴らしく、いつも尊敬させられるような人も、まちを見る目が全然、なんてことがある。自分自身の「自然を見る目」のはがいなさにいつも悲しくなる私でも、道ひとつでこうやって楽しく環境について考えられる。素晴らしい目を持った多くの人々が、その目を少しでもまちを見る目に振り向けてくれたら、その目をもって積極的に行政のまちづくりに参加してくれたら、そうしたら今までにない「まち環境教育」と「まち環境保全」が実現できるのではないだろうか。そう信じて、これから、皆さんの目をこちらにも引き付ける方法を画策することにしたい。



## RECYCLEからREDUCEへ カナダ報告

豊中市立第八中学校教諭 高田 研

ビクトリア大学に留学中の井上 有一先生（奈良産業大学）からいただいた「ぜひおいでください。」というお手紙の末尾の儀礼的表現に付け込んで、あつかましくもご家庭に転がり込み、迷惑をおかけして来たのですこし報告しておきたい。

井上先生の学ばれているビクトリアはブリテイッシュコロンビア州の州都であり、カナダの西の玄関口のバンクーバーからはフェリーを使って4時間、飛行機で20分の位置にある。政治都市というよりもダウンタウンはにぎやかな観光都市である。先生の下宿はここからバスで20分ほどの閑静な住宅街の一角にあった。今年秋から同大学に入学が決まられた奥様と、お子様の3人でお暮しである。先生は留学半年の間、大学一保育所—スーパーマーケット—家とこの4点を結ぶ行動圏で生活されており、ここを離れられたのが、ダウンタウンに2回、あとはブラジル会議に出席したときだけだそうで、先生の勉強ぶりが伺える。

先生とたくさんの施設や機関を訪問したなかで、もっとも興味深かったのはGV RDという、バンクーバーを中心とする自治体の代表が集まってつくっている環境事業体である。ここではゴミ減量のための3R教育のカリキュラムや教材を学校を対象として開発、教師への啓蒙活動を行っている。日本でもよく目につく地球を救う何とかの方法や、行政などでも最近作り始めたようなテキストの制作。また子供たちががんばった印にバッジを与える制度などがこれまでに実施されてきた。しかし教育担当官のいわく、このような対処的な個々のアクティビティでは決して問題の解決にはつながってこない。だから現在はもっとクリエイティブな問題解決ができるような能力を高めるための教育カリキュラムづくりをすすめているという。

また、RECYCLE教育というのは入口であって、REDUCE教育を打ち出すべきなのだが、現在の失業率を考えると景気を停滞させるような政策を行政としては打ち出せない難しさがあるという。この点についてやはり環境教育におけるNGOの役割が期待されるのでは。と井上先生は言われていた。

REDUCEに力を入れている企業にBCHydroというB.C州の電力会社である。ここでは州内の小中高の学校に対して80名程のスタッフが省エネ教育の普及に力を注いでいる。彼らの計算によると電力需要の伸びがこのまま続くと、それに伴う施設投資（発電所建設などの）がそれを上回ってしまい、経営上マイナスになるという説明だった。そこで一大省エネキャンペーンに打って出たようである。小学校向けにはカード型のゲーム教材を開発。中高向けにはマッキントッシュを使ったシュミレーションゲームを開発している。このゲームがなかなかのすぐれもので、現場の先生や生徒を入れたワーキングチームが1年余かけて1000万円ほどの開発費をかけて制作した。日本の原子力発電所の建設については、企業からの電力消費をまず減らす努力からはいらねばならないのではないかとコメントされていた。ただしスウェーデンのように電力増の見込めない国の事情のなかでこれを企業が取り組むのはむずかしいだろうということだった。関西電力もこの夏はクーラーの消費を抑える子供への努力をされていたとか。これからの日本の企業の動きにも期待していきたい。

# 「開発教育」の推進へ

左京区に資料センターがオープン

## 地球規模の課題に対応

南北問題など地球規模のさまざまな課題に対応するための図書や研究資料を集めた開発教育資料センターが一日、京都市左京区一乗寺竹の内町の関西セミナーハウス内にオープンした。同ハウスでは、世界に存在する貧困や人権抑圧を理解し、自己啓発する「開発教育」の普及に努めており、特に三年前から関西地区の小、中、高教師らを対象に開発教育推進セミナーを実施。最近では参加者が持ち寄る図書や論文資料を体系的に整理、保管し、開発教育の普及をはかるセンターの開設が検討されていた。五百冊におよぶ図書について同センターでは、「貧困・食糧」「人権・少教書」

「女性」など千のキーワードを基に分類し、和洋別に収録。ほかにデータブックやビデオ、スライドなど多様な資料を収めている。年会費三千元（維持会費五千元）の会員制だが、会費外の閲覧もできる。五月からは会員への資料貸し出しも行われる。岩崎裕保同センター運営委員長は「世界に存在する貧困、人権、環境の諸問題に対し日本人の果たすべき役割は日増しに増えている。センターを通じて一人でも多くの方に開発教育の必要性を認識していただければ」と話している。

1992.4.2

# ネット・ワーク



- ◆ 9/6(土)～7(日) 青少年活動指導者のための環境教育ワークショップ  
 会場 大阪YWCA千里センター 阪急北千里駅より 西へ徒歩5分  
 講師 ルース・レクテイ (世界YWCA環境問題担当幹事)  
 ねらい 参加体験型のワークショップで、地球環境や身近な環境問題についてその現状・原因の把握、そして解決にむけた方法を学ぶ。  
 問い合わせ 大阪YWCA 06-361-1815

◆ 9/13(日)～15(火)第4回環境共育ワークショップ

六甲森の開発人デベロッパ-

会場 大阪YMCA六甲研修センター

ゲスト 荒木 眞 建築家

テーマ 僕らにとっての持続可能な開発

問い合わせ 大阪YMCA六甲研修センター 078-891-0050

◆ 9/18(金)第5回 奈良環境教育研究会 例会

PM6:00～9:00

会場 橿原市文化会館(07442-3-2771)

近鉄八木駅下車 西へ徒歩5分

主催 大阪YMCA SMILE人間/環境教育研究会

話題提供 河合 正夫 あやめ池自然博物館

内容 「虫と環境」博物館による社会教育を通して

問い合わせ 本庄 眞 自宅 07435-2-8527

奈良教育センター0742-26-2341

※10月例会は下旬「ことばと環境教育」の予定

◆ 9/19(土)～21(月)

日本環境教育フォーラム(仮称)清里ミーティング92

会場 山梨県北巨摩郡清里3545(財)キープ協会 清泉寮

主催 「日本環境フォーラム(仮称)」設立準備会

問い合わせ 同 準備会事務局 0551-48-4380

◆ 10/24(土)10:00～18:00

シンポジウム「生き物と共生するまちづくり・里づくり」

地球環境時代におけるビオトープの保全と復元をめざして

主催 自然環境復元研究会(社)大阪自然環境保全協会

問い合わせ 大阪自然環境保全協会 06-374-3376

環境教育学会関西支部から関西の会員の皆様に、ワークショップのお知らせと関西の環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。また学会員外の方々で環境教育に関心を持っていらっしゃる方や実践をされている方とのコミュニケーションも広く図りたいと思います。

1000円の通信費(1年分)をいただきましたら、ワークショップの案内葉書とECOMAILを送らせていただきます。

通信費 振込先 郵便局 「大阪 9-37886」環境教育学会関西支部  
発行者

日本環境教育学会関西支部

〒543 大阪市天王寺区南河堀町4-88

大阪教育大学 鈴木 善次 気付

06-771-8131(内線417)

※ 次号は10月に予定しております。情報、原稿をお寄せください。